

受験番号				
------	--	--	--	--

## 人文・社会科学

### 問題冊子

#### 指 示

---

合図があるまでは絶対に中を開けないこと

---

1. この試験は、資料を読んで、あなたがその内容をどの程度理解し、分析し、また総合的に判断することができるかを調べるためのものです。
2. この冊子は前半が資料で、後半に40の問題(1-40)があります。配点は80点満点です。解答カードには表裏あわせて50の解答欄がありますが、41以降は使用しないで下さい。
3. 解答のための時間は、正味80分です。資料を読む時間と解答を書く時間の区切りはありませんから、あわせて80分をどう使うかは自由です。
4. 解答のしかたは、問題の前に指示してあります。答えの記入のしかたが指示どおりでないと、正解でも無効になります。
5. 答えはすべて、解答カードの定められた枠の中に鉛筆を用いてマークして下さい。それ以外のところに書いたり、また答え以外のものを書きこんだりすると無効になります。
6. 一度書いた答えを訂正するには、消しゴムできれいに消してから、あらためて正しい答えを定められたとおりに、はっきりマークして下さい。
7. メモにはこの問題冊子の余白を用い、ほかの紙は使用しないで下さい。
8. 「解答やめ」の合図があったら、ただちにやめて下さい。試験監督が問題冊子と解答カードを集め終わるまでは、退室できません。
9. この指示について質問があるときは、試験監督に聞いて下さい。ただし問題の内容に関する質問はいっさい受けません。

---

「受験番号」を解答カードの定められたところに忘れずに書き入れること

---

(余 白)

## はじめに

2020年に全世界に広がった新型コロナウイルス（COVID-19）の感染は現在も終息しておらず、皆さんおよび皆さんのご家族、知人も多くの苦労をなされてきたことだろう。流行の発生以来、この問題は「病気に対する人類の戦い」として語られることが多かった。ここではもう少し長い時間軸のなかで、人間および社会が感染症を初めとする病気とどのように関わり、いかなる課題に直面してきたのかを考えてみたい。

### —

新型コロナが蔓延<sup>まんえん</sup>し始めた時、人々が重ね合わせたのはペストの記憶だった。ペストは黒死病と呼ばれる。以前は患者の全身に小さな膿疱<sup>のうほう</sup>や出血性の紫斑（紫色の斑点）が現れ、患者の身体や遺体が黒ずむためにこう呼ばれたと言われてきた。だが最近では当時のヨーロッパで黒が「恐ろしい」という意味で用いられたことに注目し、17世紀にペストが「畏怖の念を与える疫病」という意味で黒死病と呼ばれるようになったと考えられている。

イタリアは14世紀半ばにヨーロッパを襲ったペスト大流行の舞台であり、ヨーロッパ全土で総人口の3割ほどが失われた。それでは当時の人々は病気をどのように考えていたのだろうか。ジョバンニ・ボッカチオの小説『デカメロン』は、フィレンツェでのペスト流行について「それは天体の影響によるものか、あるいは私どもの悪行のために神の正しい怒りが人間のうえに罰として下されたものなのか」と述べている。ここで「天体の影響」とは天体の運行が人間の病気を左右するという占星術的な病理観をさしている。

もう一つ『デカメロン』が示唆しているのは、疫病が人間の悪行に対する神の怒りの現れであり、罰であると考えられる神学的世界観である。『旧約聖書』によれば、アダムとエヴァが禁断の実を食べた時から、人間は神に背いた罪ゆえに病気の苦しみを与えられた。またイスラエルの民がモーセに率いられてエジプトを脱出する時に、神が怒り、疫病を流行させたといった記述が見られる。ペストに苦しんだ中世ヨーロッパの人々も「神は人間が犯した罪を処罰するために、人間や都市や農村に対して、先に述べた疫病やその他のことを引き起こした」（ジョバンニ・ヴィッラーニ『フィレンツェ年代記』）と述べるなど、ペストの流行は社会あるいは人間が神の意志に背いた結果与えられた罰であると考えた。

それでは人々は何のような罪が神の怒りを招いたと考えたのだろうか。宗教改革以前のヨーロッパでは、神と人間の関係を一対一の関係として捉える考え方は浸透していなかった。感染して死んだ個人が罪を犯したのではなく、社会全体あるいは特定の人々の行動が災厄を招いたと受け止められた。

当時の人々が疫病流行の原因と考えた人間の罪の一つとして「高慢さ」とくに奢侈行為があった。これは創世記に登場するソドムとゴモラの物語がベースとなっており、この二つの都市の悪徳と退廃ぶりに怒った神は硫黄と火を送って滅ぼしたとされている。中世イタリアの都市では裕福な者が華美な服装に身を包んで繁栄を謳歌し、キリスト教的な「清貧」の価値観と対立していた。疫病が流行すると、この奢侈行為が神の怒りを招いたと考えられ、多くの都市で奢侈禁止令が出された。だが疫病の恐怖を前に自暴自棄となった人々はこの命令に従わなかったという。

次に問題となったのはユダヤ人の存在だった。ヨーロッパのキリスト教世界において、ユダヤ人はイエス・キリストを十字架につけた罪深い異教徒と認識されていた。元々イタリア南部に多く住んでいたユダヤ人は14世紀に中部や北部へ移動した。彼らは商工業者の同業団体であるギルドへ加入することが許されなかったが、金貸し業などキリスト教徒が嫌がる職業に従事し、社会の中で不可欠な存在になっていた。

ペストの流行が始まると、イタリア北部でユダヤ人が襲撃される事件が発生し、ユダヤ人の追放令を出す都市が現れた。またユダヤ人であることが一目でわかるように、黄色い丸印を服に刺繍することが義務づけられた。ここで黄色い丸印は裏切りやけがれ、神の不在などを表し、先に都市住民の奢侈行為で非難された「高慢さ」も含まれた。そして黄色い丸印はユダヤ人だけでなく、都市の娼婦も意味するようになったという。

後のナチスによるホロコーストを想起させるこれらのエピソードは、もともと社会の中に存在していた他者への恐怖心や差別意識が病気の流行をきっかけに顕在化し、強化されたことを示している。またユダヤ人だけでなく、一部の女性に対しても「強欲」「ふしだら」といったレッテルが貼られ、攻撃の対象となった点にも注目すべきだろう。当時の宗教的絵画に黄色い印をつけた「高慢な」女性が罰を受けて踏みつけにされた姿が描かれている事実はそのことをよく物語っている。

## 二

近代のヨーロッパでは病気の原因が明らかになるにつれて、公権力が人々の生活に積極的に介入することで、病気の流行を未然に防ぐ公衆衛生という考え方が生まれた。

ペストなどの疫病が患者との接触、あるいは汚染されたモノとの接触で感染するという認識は中世から存在した。当時の医者是有効な治療を行うことができなかつたため、疫病対策は警察や当局が取り扱うべき治安問題とされた。そして汚染地からの船の入港を制限（検疫）する、病人の出た家と彼らの財産を処分する、病原菌をまき散らすと見なされた放浪者や下層民を隔離する措置が取られた。

近代のヨーロッパで猛威を振るったのはコレラの流行だった。コレラはインドのガンジス川河口付近に存在していた風土病とされ、19世紀に何回かのパンデミックが発生して世界各地へ広がった。イギリスには1831年に上陸し、1860年代までに4回の流行が起きたという。

当時の医学では感染症の流行について、それが患者および汚染されたモノとの接触が原因と考える接触伝染説と、「瘴気」すなわち貧民街の悪臭など汚れた空気が原因と考えるミアズマ説が主流だった。これが変化したのは、イギリスの医師であるジョン・スノウが当時ロンドン市内で流行していたコレラの感染源を特定してからである。

スノウはコレラ感染の原因は飲料水にあるのではないかという仮説を立てた。そして1854年にウエストミンスター地区で調査を行い、死者の多くがある給水ポンプから供給された水道水を飲んでたことをつきとめた。このポンプは下水と混じりやすい欠陥を抱えており、コレラ患者の排泄物が水道水に混じったために感染の拡大を生んだのである。

この調査はコレラ菌の発見までは至らなかったものの、市政府が問題となったポンプの使用を禁止したことでコレラの流行は一応の収束をみた。またこの経験は治療医学の権威を失墜させ、治療ニヒリズムを生むと共に、環境を「改良」することで伝染病を防ぐことを目的とした予防医学を発達させることになった。

イギリスの場合、伝染病対策の担い手となったのは中央と地方の保健局だった。政府関係者、医師、治安判事、牧師および有力者からなるこれらの組織は、都市の上下水道を整備したり、水洗トイレの普及に努めることで感染の拡大を防ごうとした。また18世紀からイギリスでは住民の健康増進のために「通気」を重視した都市建設が行われていた。だが衛生改革派はこれでは不十分と考え、路地裏まで含む都市空間の改革を訴えた。

こうした都市の衛生改革で問題となったのは貧困層の存在だった。彼らの劣悪な衛生環境および生活習慣が「改良」されるべき対象となったのである。まず提唱されたのは入浴で、それまでイギリスでは毎日手と顔を洗う習慣はあったが、身体を洗うことは一般的ではなかった。上下水道の整備が進むと、水洗トイレと共に入浴設備も備えられるようになり、入浴の習慣は中産階級のステータスシンボルとして広まった。そして「清潔」であることは彼らの信条となり、愚昧で「不潔な」下層民の子供を初等教育の場で「啓蒙」しなければならないと考えるようになった。

もう一つ焦点となったのは飲酒癖だった。当時飲酒の習慣は都市、農村に限らず一般大衆の伝統的なライフスタイルであったが、19世紀に始まった節酒運動はこれを「自堕落」な習慣と位置づけ、中産階級の「節度ある」生活へ導こうとした。コレラの流行が始まると、たちまちコレラは飲酒癖と結びつけられた。ある国会議員は「コレラ患者は一般的に下層階級の間にみられるのであります。そして、その犠牲者になるのは決まって酒飲みのだらしない生活を送っている者なのであります」と報告し、コレラの流行は下層階級の飲酒癖が原因であると断じ

ている。

このように公権力による衛生改革は都市の生活空間を大きく変えたが、同時にそこに住む住民間の格差を顕在化させた。疫病を予防する目的で始まった「清潔さ」の追求は、これを実践している中産階級と「不潔な者」とされた下層階級との対立を激化させたのである。そして清潔は「文明」的であることの重要な指標となり、下層民の子供に対する義務教育を通じて衛生の習慣を「内面化」させる努力が行われた。公衆衛生は近代国家が国民の生活に介入し、その身体を規律化していく過程だったのである。

### 三

こうしてヨーロッパで感染症対策として始まった公衆衛生であるが、それが絶大な「効果」をあげたのは非ヨーロッパ世界においてだった。アジア・アフリカにおける植民地の建設と帝国医療に代表される人々の統制、管理がそれである。

まず18世紀のヨーロッパ人にとって、ペストなどの感染症対策はキリスト教世界のイスラム世界に対する「優位」を証明するものだった。ヨーロッパに隣接して君臨したオスマン朝（オスマン・トルコ）は、その領域内にペスト菌流行の原因となる野生動物の生活世界（これを「自然の病巣」とよぶ）があり、これを持たなかったヨーロッパに比べてペストの流行が深刻な規模でくり返し発生した。

だがヨーロッパ人は、二つの地域におけるペスト流行の持続性と規模の違いが「自然の病巣」の有無による偶然の結果だとは考えなかった。むしろそれは自然の脅威に対するキリスト教世界の人間の主体的な対応と、ムスリムの怠惰で受け身の姿勢がもたらした結果だと受け止めた。ヨーロッパで市民革命のうねりが起きつつあった当時、モンテスキューは『法の精神』の中で次のように述べている。

ペストはその被害がさらにいっそう速く広まる疫病である……。ヨーロッパの大半の国ではペストの侵入を防ぐために非常によい規則が設けられた。さらに今日ではそれを封じ込めるための素晴らしい方法が考え出された。ペストの汚染地域の周囲に軍事防疫線を張り、すべての交通を遮断する方法がそれである。

トルコ人の場合はこの点について何の規制も行わない……。彼らはペストで死んだ人間が着ていたものを買ひ、着用し、同じ運命をたどる。厳格な宿命論がすべてを支配しているために、為政者は黙って見ているだけである。神が全てのことをおこなっているのだから、何もすることがないと考えているためである。

ここでは公権力の疫病対策によってペストの流行を封じ込めたヨーロッパ世界の優秀さと、有効な措置を講じずに被害を拡大させたトルコ為政者の無策ぶりが対比され、その原因をそれぞれの宗教がもつ人間観の違いに求めている。ペストに苦しみ続けた「瀕死の重病人」であるトルコの姿は、予防措置によって疫病に勝利した近代ヨーロッパ文明の優越性を示す証拠と見なされたのである。そしてこの文明を非ヨーロッパ世界に移植することはキリスト教世界に課せられた使命——後の言葉で表現すれば「文明化の使命」であると考えられるようになった。

イギリスが植民地経営を行った場所にインドがあった。気候や風土が大きく異なるインドの統治は、イギリス人にペストやマラリア、赤痢、腸チフスなど様々な病気に感染する危険をもたらした。とくに衛生対策が問題となったのは駐屯軍の兵舎と監獄だった。

19世紀前半のインドには20万人を超えるイギリス軍がいた。そのうちヨーロッパ出身の兵士は4万人だったが、彼らの死亡率は高く、1815年からの40年間で10万人が主として病気で死亡した。兵士の損失を防ぐため、イギリスはヒマラヤ山脈の麓に高原駐屯地（ヒル・ステーション）を設け、イギリス人部隊の一部を配置した。また「地上最大の酒飲み集団」と言われたイギリス人駐屯部隊の飲酒癖に対する統制が、本国の下層民の場合と同じように行われた。さらに若い兵士のあいだに流行した梅毒などの性病については、感染したインド人売春婦の身柄を拘束して性病病院で治療させる接触伝染予防制度が行われた。この制度は19世紀後半に差別的であるとの理由で廃止されたが、代わりに駐屯地の規則強化と兵士への啓蒙活動が行われたという。

いっぽうインド人兵士やその家族の衛生についてはどうだろうか。当時イギリスには積極的な衛生政策を唱える人々がいた。看護師としてクリミア戦争を体験し、統計に基づく衛生改革に取り組んだフローレンス・ナイチンゲールは、インドを「流行病の巣窟」と呼び、公衆衛生の組織を作って「原住民」すなわちインド人に高度な文明をもたらすべきだと主張した。1864年に彼女は新インド総督のジョン・ローレンスに次のように書き送っている。

これから、あなたは文明によって新たにインドを征服なさるのです。はじめて、剣のかわりに知識によって帝国を領有なさるのです。

ここで衛生改革は新たな「知識」に基づく「文明」であり、これを用いてインドを「征服」「領有」すべきだという帝国医療の考え方が明確に語られている。

だが実際にはイギリス当局の公衆衛生に対する関心は高くなかった。その原因の一つは予算不足であり、経済的損失を意味するイギリス人将兵の疾病率や死亡率を引き下げる試みは行われても、インド人兵士の衛生環境まで顧みる余裕はなかった。インド人兵士は兵舎をあてがわれず、自分たちで建てた小屋で自炊生活をした。彼らの住環境は劣悪で、ウイルス性の呼吸器

感染に苦しみ、インフルエンザの流行で多くの死者を出した。

またインドで衛生問題に取り組んだ医者や官吏の多くは、インドの伝統医療に不信感を抱いていた。元々インドには古代文明の時代から積み重ねられたヒンドゥー医療があった。だがイギリス人は熱帯であるインドの風土に強い「他者性」を見だし、ヒンドゥー医療を怠惰と伝統に縛られた「進歩にとって超えがたい障害」と見なした。こうしたイギリス人の差別的なまなざしに対して、インド人の多くは抵抗や不服従の姿勢を見せた。とくにインド人兵士は自分たちの文化にとって脅威となるヨーロッパ式の軍事規律や組織の命令に反発した。

その結果、イギリスはインドにおける医療と衛生について不介入政策を取った。マラリア対策として構想された熱病病院の建設は実現せず、代わって宣教師による医療伝道や病状の緩和を目的とする安価な医療機関である施療院の建設が進められた。だがその数は人口比に比べて少なく、入所した患者の多くは貧困層によって占められた。また医師は男性が多く、女性の生活空間を隔離するヒンドゥー社会の習慣もあってインド人女性が医療を受ける機会は限られていた。これを補ったのがイギリス、アメリカ出身の女性宣教師による医療活動であったが、彼女たちは専門知識や助手の不足に苦しんだ。

1860年代にイギリスはインド人兵士を対象に天然痘の予防措置として牛痘接種を開始し、やがて彼らの家族も対象に含まれるようになった。だがこの接種は医療行為としてよりも、イギリス人に仕えていることの「マーク」として受け止められたという。非ヨーロッパ世界に伝えられた近代的な公衆衛生は、人々に「身体の植民地化」をもたらすものと認識されたのである。

#### 四

19世紀後半にイギリスがインドと並んで植民地支配を進めた場所に香港があった。のちに「東洋の真珠」とうたわれたこの貿易港には、亜熱帯の気候もあってマラリア、ペストなど様々な病気が存在した。イギリス人は少しでも感染を防ごうと、香港島のビクトリアピークにつらなる斜面に住居を構えた。もともと辺境の漁港だった香港の人口は少なかったが、太平天国の動乱で広東の人々が多く避難し、ヨーロッパ人居住区と隣接する形で居住区を形成した。

この中国人居住区に対する衛生対策をどのように進めるかについて、香港のイギリス人統治者の間には二つの考えが存在した。その一つはインド統治と同じ不介入主義であり、香港が自由貿易の基地として機能する限り、それ以上の現地社会への干渉は行わないという立場である。それは中国系住民に統治への関与を認めない代わりに、彼らの生活への介入も最小限にとどめるといったものだった。

もう一つの考えは中国人社会への介入なくしては香港の公衆衛生は成り立たず、代わりに現



地の中国人有力者の意向をある程度まで政策に反映させるというものだった。そしてイギリスの香港統治は二つの考え方がせめぎ合うかたちで進められた。

まず香港政庁はイギリス本国の大学を卒業した若者に現地語である広東語を学ばせ、官吏として採用することで中国系住民とのコミュニケーションを図った。また1870年に中国人の商業エリートが東華病院を設立すると、この病院は植民地当局と中国人社会を媒介する公共サービス機関の役割を担った。さらに1878年に香港総督となったジョン・ポープ・ヘネシーは、香港の行政機関である立法評議会に中国人メンバーが入ることを認めた。

こうした変化を背景として行われた香港の衛生改革で、焦点になったのは下水処理の方法をめぐる論争だった。ある植民地医官は、香港で腸チフスが流行しているのは「家畜と人間が狭い敷地で寝食を共にしている」中国系住民の衛生観念の欠如が原因であり、イギリス本国の衛生政策にならって下水道や水洗トイレを整備させ、巡視官による衛生管理を強化すべきだと主張した。これに対してヘネシーは、くみ取った下水を土砂で乾燥させる在来の「土壌乾燥法」でも十分な効果があり、現地のヨーロッパ人や中国人家主が難色を示している水道工事の費用負担を軽減できると反論した。

この論争は公衆衛生に関する公権力の介入をどこまで認め、経済活動の自由を求める現地社会の意向とどのように折り合いをつけるかという問題を提起していた。やがてイギリス本国からオズバード・チャドウィックが派遣され、香港の衛生状態に関する調査を行って報告書を提出した。そこで彼は不衛生の原因を中国系住民の無知に求めることは適当でなく、下水道などのインフラ整備は香港政庁が公的責任として取り組むべきとの見解を示した。また衛生政策の方針を決定する機関として設置された衛生委員会には、イギリスに留学して中国人として初めてイギリスの医師資格を獲得したホー・カイ（何啓）など中国人エリートの参加が認められた。彼の熱心な活動の結果、住宅への衛生基準の適用は中国人家主たちの主張に配慮して新規の建築物に限定されることになったという。

このように香港では植民地当局が現地社会の意向を踏まえつつ衛生政策を進めたが、他地域では公権力の介入が現地住民の激しい反発を招くケースが見られた。

そのきっかけは1896年のインドにおけるペスト流行だった。当時香港で流行していたペストがインドへ上陸すると、インドは厳しい予防措置を取らない限り貿易を中止するというヨーロッパ諸国の圧力を受けた。そこでインド総督府は1897年に危険流行病予防改善法を成立させた。この法令は①感染の疑いがある者の身柄拘束と隔離、②ペストの温床とみられる家屋の消毒、解体と住民の退去、③祭りや巡礼の禁止、④道路や鉄道の旅行客を臨検し身柄を拘束することを認めていた。

ペスト撲滅のために植民地当局に絶大な権限を与えたこの法令は、インド人の激しい反発を引き起こした。あるインド系の新聞は、それまでイギリス当局が行った諸政策の中で「これほ

ど組織だって大々的に国民の家族と社会と宗教の習慣に介入したことはなかった」と抗議した。また宗教的儀礼やカーストなどインド固有の習慣を「迷信的な障害」と見なし、これを無視して患者の拘束や遺体の検視、女性の隔離を行う植民地行政の「冷淡さと無神経さ」に、「衛生科学という名前で実行された犯罪行為」との批判が高まった。そして暴徒化した人々が病院や隔離施設を襲撃する事件が多発した。

これと似た現象は東アジアの国際都市だった上海でも発生した。上海でペスト患者が確認されたのは1908年だった。当時上海はヨーロッパ諸国が外国人居留地である租界を形成して統治していたが、その行政機関である工部局衛生処は1910年に患者や感染が疑われる者の強制隔離、殺鼠薬の配布、患者発見のための医師による個別検査などを行った。また感染が疑われた建物とその周辺では住民を退去させ、家屋を燻蒸して家財や日常生活用の器具を消毒あるいは焼却する措置が取られた。

これら租界当局の措置に対して、民衆が医師や警官を取り囲んで検査を妨害したり、暴行を加える事件が発生した。また検査を口実に子供が誘拐されるのを恐れて租界を脱出する子連れの母親や、検査が噂される工場、学校へ行くことをボイコットする女工、女学生が多く出た。初めこの上海ペスト騒動は「病院に隔離された人の身体を原料として薬を作っている」といったデマに惑わされた「無知」な下層民の排外的な行動と報じられた。だが次第に感染防止のための厳格な隔離や外国人医師による馴染みのない検査、専門化された近代医療空間（病院）に対する人々の恐怖心が原因であることが明らかになった。

それまで中国社会で医療とは、医者と患者が病院という閉鎖的な空間で行うものではなかった。中国の伝統医療は患者の家族や友人が主体となり、患者の家庭で行われる開放的なもので、治療する医師も患者側が自分たちで探し、名医を選択するのが普通だった。このため強制隔離や指定病院への入院を伴うペスト対策は、病人および治療行為は家族を中心とした私的な領域に属するという社会通念を侵犯するものと受け止められたのである。

結局この事件は感染症対策といった人々の身体に関わる問題については、現地社会の習慣や人々の意向を無視した強圧的な政策は立ちゆかないことを明らかにした。また植民地や租界の運営には現地人の代表が加わることが不可欠であり、1928年には上海に中国人のリーダーである董事が誕生することになる。近代文明の「正しさ」を示すものとして広められた予防医学や公衆衛生の概念は、そこに住む人々を「他者」として従属させ、支配することによっては決して受け容れられないことが明らかになったのである。

## 五

さて歴史のなかの病気と社会について考えるとき、もう一つ避けて通ることのできない題材

がある。1947年に出版されたアルベール・カミュの小説『ペスト』である。

この小説は突然のペスト流行に襲われて封鎖された町を舞台に、人々が理屈を超えた「不条理」な災厄に苦しみながら抵抗する姿を描いた作品である。舞台は当時フランスの植民地だったアルジェリアの港町であるオランで、1940年代のある4月、医師のリウーがネズミの死骸を発見したところから話が始まる。やがてペストによる死者が出るようになり、リウーは危機を訴えたが、県知事は責任回避の態度に終始した。だが上級機関である総督府から命令が下り、9ヶ月におよぶ厳密な都市封鎖が実行された。

この作品の中で、都市封鎖は人々の生活を一変させた。カミュは「ペストがわが市民にもたらしたものは追放状態だった」と述べている。食料品やガソリンが配給制となり、人々は生活必需品を手に入れるために行列を作った。また彼らは現状に苛立ち、未来を奪われた状態に陥ったという。こうして時間の囚人となった人々の姿を、「人類の正義あるいは憎しみによって鉄格子の中に暮らさせられている人々」とカミュは表現した。

6月末にペストの死者が週に700名を超えると、当局は被害が集中していた町の外郭部を隔離する措置に出た。これは人口密集地に住んでいた下層民に疎外感をもたらし、彼らは制限区域外に住む富裕層が不当に「自由」を謳歌していると不満をつのらせた。かたや富裕層にとっては、自分たち以上に「束縛」されている者がいると考えることが「唯一の希望」となった。隔離政策はそこに生きる人々の間に分断をもたらしたのである。

夏から秋にかけて死者が続出する状況が続くと、恐怖の中で絶望した人々は冷静な判断力を失い、自暴自棄な行動に走り始めた。武装集団による略奪事件が相次ぎ、これに抵抗する人々との間に衝突が発生した。またペストの脅威が市の中心部へ及ぶと、富裕層の中には恐怖のあまり自分の家を焼き払う者が現れた。さらに夜間の消灯規制措置が取られると、オランは「ペストと石塊と暗夜とがすべての声を沈黙せしめた」死の町となったという。

その後ペストの流行は止まり、人々は歓喜したが、リウーと共に自由意志に基づく保健隊を組織して救援活動に尽力したタルーなどが病に倒れ帰らぬ人となった。そして作品はペスト菌が決して消滅することはなく、いつか人間に不幸と教訓をもたらそうと、ネズミをどこかの幸福な都市に送り込むだろうという言葉でしめくくられている。

この作品に描かれたペストに支配された町と人々の苦悩する姿は、フィクションであることを忘れさせるほどのリアリティを持っている。またこの絶望的な不条理に抵抗しようとする人々の姿をどのように読み解くのかについて、これまで様々な解釈が生まれてきた。

まず多かったのは、ペストの流行と都市封鎖をナチスドイツのパリ占領と結びつける見方である。これは『ペスト』の刊行時期が第二次大戦直後だったことと関わっており、カミュ自身も「ナチズムに対するヨーロッパのレジスタンスの闘いを明白な内容としている」と認めている。もともとカミュはスペイン内戦に強い関心を寄せていた。また1940年にパリへ移った彼

はレジスタンスの活動に加わっており、作品中に登場する保健隊もその時の経験をベースとしていたという。

次に議論されてきたのは「神なき時代」における抵抗の文学としての側面であった。とくにベストの流行に人間の罪に対する「神の裁き」を見て、人々に悔い改めを説いた神父パヌルーに対して、ある少年の死に共に立ち会ったリウーは「あの子だけはともかく罪のない子だった」「子供たちが苦しめられるように創造された世界を愛するなんて、私は死んでも拒否します」と怒りをぶつけた。すると神父は二度目の説教で受け容れがたいものをも「恩寵」として受容する信仰について語るが、まもなく神父自身が病に倒れ、医師の診察を拒んだまま死んでしまう。

カミュは理屈で説明のつかない災厄に対して、超越的な存在によってその苦難を意味づけた。来世での救済を約束することは問題の解決にならないと考えた。ただ人間は醒めた「自由」な精神を手がかりに、目の前にある現実<sup>ひょうぼう</sup>に他者との連帯感をもって誠実に向き合い続けることしかできないという考えを登場人物に語らせている。

超越的な価値による審判である「上位審級」を拒否したカミュの姿勢は、当時のヨーロッパを代表する進歩的知識人だったサルトルとの論争を生んだ。そこで問題となったのは科学的社会主義を標榜するマルクス主義の評価だった。サルトルは実存主義の立場に立ちながら、世俗化された終末論としての側面を持つマルクス主義に支持を表明した。これに対して若き日に共産党に入党した経歴を持つカミュは、歴史の必然性（発展段階論）を絶対視して暴力革命を肯定するマルクス主義の抑圧的な体質に異を唱えた。こうした考えは『ベスト』にも反映されており、カミュは判事の息子だったタルーに「今日では、だれもが競って殺そうとしている。彼らはみな殺人の狂熱に取りつかれ、それ以外の行動ができないのだ」などと語らせている。

さらに彼の死後に注目を集めたのが、カミュは植民地主義者か否かという問題である。これはオリエンタリズムを批判したエドワード・サイードが『文化と帝国主義』で、カミュを「帝国主義のアクチュアルな現実が本来あってもおかしくないにもかかわらず、すっぱりと抜け落ちている作品を書いた小説家」と批判したことがきっかけである。

カミュはアルジェリア生まれだが、祖先はボルドーからの入植者で、母親もスペインからの移民だった。彼は1938年からアルジェリアの新聞社で戦争反対と植民地統治批判の論陣を張り、当局から危険人物として「追放」された経歴を持っていた。『ベスト』でカミュは疫病の流行を前に積極的な対策を取らず、やがて一転して人々の生活に介入した植民地当局の姿を描いている。

また作品には厳しい封鎖が続く中、リウーが友人となったタルーを夜の海水浴に連れ出す場面がある。カミュにとって海とは地中海世界の開放性を象徴するものであった。古代ギリシャの伝統をひく「地中海精神」は、歴史を動員することで自分たちの真理を絶対化する「ドイツ

・イデオロギー（歴史哲学）」とは一線を画すものと彼は考えていた。少なくともカミュは「文明化の使命」を標榜し、公衆衛生を通じて植民地の人々を飼い慣らすような近代ヨーロッパ文明の姿には拒否の姿勢を示したかもしれない。

ただしそれは彼のいう「地中海精神」が、出自や民族の異なる人々を包摂する多様性を帯びた世界であることを意味しなかった。『ペスト』で感染が拡大するオランの姿が描かれるとき、人口密集地に住む下層民だったベルベル人、アラブ系住民などの先住民は保健隊の治療を受ける客体として登場するだけで、主要な登場人物には決して入ってこない。またカミュは『異邦人』の中で理由もなく殺されるアラブ人を無慈悲なタッチで描き、後にアラブ人作家の批判を受けた。

1954年にアルジェリア戦争が勃発すると、カミュは植民者と先住民、対仏協力者と独立支持者との分断が広がる社会の現実には曖昧な態度をとり続けた。それは彼にとって地中海世界の融合を破壊するものであり、また反植民地主義がかかえる激しい攻撃性にも共感を持てなかったのかも知れない。こうした彼のスタンスがサイドの批判につながったと見るべきだろう。

このようにカミュは様々な立場から批判を浴び、フランスでの評価も一様ではなかった。だが本論のテーマに即して見たとき、彼の思想と行動には一つの特徴を見て取ることが可能だろう。カミュは自分たちの掲げる正義を絶対化し、そこから外れてしまう「他者」を攻撃するような排他的な文明観を拒否した。むしろ彼は近代ヨーロッパ文明を深くとらえていた植民地主義やオリエンタリズムから必ずしも自由ではなかった。だが少なくともファシズムであれ、マルクス主義であれ、それが人を殺すことを是認してしまう自己中心的な思想となった時には「ノン」を叫んだのである。

## おわりに

本論は歴史のなかの病気と社会について、可能な限り歴史の具体的な諸相に注目して振り返ってみた。その内容を見る限り、「病気と科学の戦い」というイメージとは裏腹に、人間は病気を前にしたときに不安から他者に対する違和感を呼び起こし、相手を排斥して差別を強化することをくり返してきた。また近代に公衆衛生という概念が普及すると、「改良」すべき相手として下層民が想定されるようになった。さらに近代ヨーロッパ世界は自分たちの文明の「優位」を確信し、その正しさを広めることが世界の救済につながるという使命感のもと、非ヨーロッパ世界を植民地という従属的な立場に位置づけ、飼い慣らした。

同じことは他の地域の歴史についてもあてはまる。明治期の日本ではペストの流行をきっかけに、元々存在した被差別部落に対する公権力の統制が行われ、人々の差別意識を助長した例が報告されている。またハンセン病についても、それが隔離措置を伴う根の深い差別を伴って

いたことが近年明らかになっている。さらには20世紀末にアメリカを初めとして世界的な問題になったエイズの流行も、それが黒人の同性愛者に特有の病気という偏見を生んだことは記憶に新しい。

現在もしばしば唱えられる「病気との闘いの歴史」「病気の克服と復興の記録」といった言説には、こうした弱者への差別的なまなざしを是認し、固定してしまう進歩主義的な価値観が色濃くまわりついている。私たちが病気について考える時、まず注意を払うべきは自己中心的な歴史認識や公権力の強圧的な施策に現れる社会の歪んだ構造なのである。

#### 参考文献（代表的で入手し易いものに限った）

- 見市雅俊「公衆衛生の発展と身体の規律化——ヨーロッパ近代」（二宮宏之ほか『シリーズ 世界史への問い 5 規範と統合』第10章、岩波書店、1990年）。
- 見市雅俊『コレラの世界史 新装版』晶文社、2020年。
- 児玉善仁『「病気」の誕生—近代医療の起源』平凡社、1998年。
- E. W. サイド『文化と帝国主義』1 みすず書房、1998年。
- 酒井シヅ編『疫病の時代』大修館書店、1999年。
- 千々岩靖子『カミュ 歴史の裁きに抗して』名古屋大学出版会、2014年。
- 三野博司『カミュを読む——評伝と全作品』大修館書店、2016年。
- 永島剛ほか編『衛生と近代—ペスト流行にみる東アジアの統治・医療・社会』法政大学出版局、2017年。
- デイヴィッド・アーノルド『身体の植民地化——19世紀インドの国家医療と流行病』みすず書房、2019年。
- 中条省平『アルベール・カミュ ペスト——果てしなき不条理との闘い』NHK出版、2020年。
- アルベール・カミュ、三野博司訳『ペスト』岩波文庫、2021年。

---

次の問題（1－40）には、それぞれ a, b, c, d の答えが与えてあります。  
各問題につき、a, b, c, d のなかから、最も適切と思う答えを1つだけ選び、  
解答カードの相当欄をマークして、あなたの答えを示して下さい。

例 (41)

( a ) ( b ) ( c ) ( d )

---

次の問いに最もふさわしいと思われる回答をマークしなさい。

1. ペストが黒死病と呼ばれた理由について、筆者が最もふさわしいと考えているのは次のうちどれか。
  - a. 患者の遺体が真っ黒に黒ずむのは、神の人間に対する罰と考えられたため。
  - b. 患者に現れる黒い斑点に接触すると感染すると考えられたため。
  - c. 患者の身体の黒い斑点が現れるのを死刑宣告と受け止められたため。
  - d. 当時のヨーロッパで黒が恐怖や畏怖をあらわすシンボルだったため。
  
2. 14世紀にヨーロッパを襲ったペスト大流行の結果に関する説明として、最もふさわしいのは次のうちどれか。
  - a. ペストの感染経路を研究する医学者が増え、医学が飛躍的に発展した。
  - b. 文化が活気を失い、14世紀以来200年間ヨーロッパの文学、美術、音楽などの文芸は沈滞の一途を辿った。
  - c. ヨーロッパに住んでいた総人口の3割ほどの命が失われた。
  - d. 女性、ユダヤ人、貧民など、当時の社会的弱者が国の特別な保護と援助を受けた。

3. 小説『デカメロン』の著者や時代背景に関する説明として、正しくないのは、次のうちどれか。
- a. 『デカメロン』が執筆された時代には、天体の運行が人間の病気を左右するという占星術的な病理観が存在した。
  - b. 著者であるジョバンニ・ボッカチオは、30代の時にフィレンツェでのペスト流行を体験し、その惨状を『デカメロン』で記した。
  - c. 『デカメロン』は、15世紀半ばに発生したペスト流行を背景に生まれた文学作品である。
  - d. 『デカメロン』では、疫病が人間の悪行に対する神の怒りの現れであり、罰であるという病理観が登場するが、それは当時のヨーロッパで広く受け入れられていた考え方であった。
4. ペストが流行していたイタリアで、ユダヤ人が差別を受けた事実として最もふさわしいものを一つ選べ。
- a. ユダヤ人はイタリアの経済を支配していたため、奢侈行為を働く高慢な存在として嫌悪されていた。
  - b. ペストの流行が始まると、ユダヤ人は服にけがれを意味する印をつけることを義務づけられた。
  - c. ペストの流行が始まると、ユダヤ人は都市の娼婦と共に収容所に隔離された。
  - d. ユダヤ人の追放令が出されると、イタリア全土でユダヤ人に対する襲撃事件が長く続いた。
5. 感染症対策として公衆衛生という考え方が生まれた理由として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 当時のヨーロッパで感染症対策は行政や治安当局が扱うべき問題と考えられていたから。
  - b. 当時のイギリスでは貿易重視の視点から疫病の上陸を水際で食い止める政策が失敗したから。
  - c. 当時のヨーロッパでは疫病の原因を悪い空気に求める考えが大きな影響力を持っていたから。
  - d. 当時のイギリスでは富裕な中間層と貧困層との対立が深刻だったから。



6. 「ミアズマ説」に関する説明として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 疫病対策は、病原菌をまき散らすと見なされた放浪者や下層民の隔離から始めるべきであるという主張。
  - b. 疫病対策は、警察や当局が取り扱うべき治安問題であるという主張。
  - c. 感染症の流行は、患者および汚染されたモノとの接触が原因で起きるといふ仮説。
  - d. 感染症の流行は、貧民街の悪臭など、汚れた空気が原因で起きるといふ仮説。
7. 18～19世紀半ばのイギリスで主流だった感染症に関する考え方として最もふさわしくないものを一つ選べ。
- a. 感染症は患者や汚染されたモノとの接触が原因で起きるのであり、検疫や下層民の生活習慣の改善が有効である。
  - b. 感染症は細菌が引き起こすものであり、衛生政策によって細菌を駆除することが重要である。
  - c. 感染症は空気の流れが滞ることが原因であり、住宅の通気に配慮した都市建設が重要である。
  - d. 感染症は汚れた水が原因であり、上下水道を整備することで感染の拡大を防ぐことが重要である。
8. イギリスの医師であるジョン・スノウの医学的業績を最も適切に説明しているのは次のうちどれか。
- a. 顕微鏡でコレラ菌を発見し、感染源であったポンプの使用を禁止する措置を取るようになった。
  - b. フィレンツェ市内で流行していたコレラの感染源を特定した。
  - c. コレラ感染の原因は飲料水にあるという仮説を立てた。
  - d. コレラに対するワクチンの開発に成功した。

9. コレラに関する説明としてふさわしくないのは、次のうちどれか。
- a. 元々インドのガンジス川河口付近に存在していた風土病であった。
  - b. イギリスでは1860年代までに4回の流行が起きた。
  - c. イギリスには1831年に上陸し、19世紀半ばにロンドンで感染源の調査が行われた。
  - d. 18世紀に何回かのパンデミックが発生して世界各地へ広がった。
10. 19世紀のイギリスの習慣に関する説明として、もっともふさわしいのはどれか。
- a. 当時のイギリスで入浴は貴族だけに認められた特権だった。
  - b. 当時のイギリスでは下層階級の子供が教育を受ける機会はなかった。
  - c. 当時のイギリスでは貴族以外は飲酒の習慣がなかった。
  - d. 当時のイギリスでは中産階級を中心に入浴の習慣が広がった。
11. イギリスで公権力による衛生改革がもたらした変化に関する説明として正しくないのは、次のうちどれか。
- a. 18世紀から住民の健康増進のために「通気」を重視した都市建設が行われていた。
  - b. 上下水道の整備が進むと、水洗トイレなどが用いられるようになり、「清潔」は中産階級のステータスシンボルとして広まった。
  - c. 衛生改革は都市の生活空間を大きく変え、そこに住む住民間の経済的な格差を露呈させたが、政治的な腐敗は隠蔽された。
  - d. 都市の衛生改革で問題となったのは貧困層の存在であり、彼らの劣悪な衛生環境および生活習慣が「改良」されるべき対象となった。
12. モンテスキューの『法の精神』に関する説明として、ふさわしくないのは次のうちどれか。
- a. 権力分立を定式化した著書として有名である。
  - b. 1648年にジュネーヴで出版された政治哲学の著書である。
  - c. モンテスキューは、この著書で立憲主義、奴隷制廃止、市民的自由の保持などを主張した。
  - d. この著書に表われた思想は、フランス革命中の憲法にも深い影響を及ぼした。

13. 18世紀のヨーロッパ人はなぜ自分たちの文明がオスマン朝よりも優れていると考えたのか、筆者の考えに最も近いものを一つ選べ。
- a. ヨーロッパ人が人間の主体的対応の結果、疫病の発生を防いだのに対して、トルコ人は受け身な姿勢に終始したと考えたから。
  - b. ヨーロッパにはペストの原因となる自然の病巣がなく、オスマン朝にはそれが存在したから。
  - c. ヨーロッパの君主が近代医学を擁護したのに対して、オスマン朝の君主が政治的に腐敗していたから。
  - d. ヨーロッパは厳格な防疫策を行ったのに対して、オスマン朝は君主の力が弱く国民の移動を統制できなかったから。
14. ナイチンゲールが看護師としてクリミア戦争を体験し、統計に基づく衛生改革に取り組んだことは有名である。クリミア戦争について、正しくない記述は次のうちどれか。
- a. 例外的に、宗教的および人種的な葛藤には影響をほとんど及ぼさない戦争であった。
  - b. この戦争では、多くの傷病兵が劣悪な衛生環境に苦しんだ。
  - c. この戦争の結果、ロシアの南下政策は阻まれた。
  - d. フランス、イギリス、オスマン朝、ロシアなどが参戦した国際戦であった。
15. 削除

16. 筆者はナイチンゲールが新インド総督へ送った言葉をどのように評価しているのか、最もふさわしいと思われるものは次のうちどれか。
- a. ナイチンゲールが献身的な態度でインド人の衛生環境を改良しようとした努力は賞賛されるべきである。
  - b. ナイチンゲールが武力に代えて公共衛生を中心にインド統治を進めた平和主義的姿勢は評価されるべきである。
  - c. ナイチンゲールがイギリス人の健康だけを重視し、インド人の衛生環境については無関心だったことは批判されるべきである。
  - d. ナイチンゲールが自分たちの文明を高く評価するあまり、インド人を教化や支配の対象と見なす態度を取ったことは批判されるべきである。
17. イギリスが植民地であるインドに対して行った医療政策の説明として最もふさわしいのは、次のうちどれか。
- a. インドで衛生問題に取り組んだイギリスの医者や官吏の多くは、インドの伝統医療であるヒンドゥー医療をインドにおける医療政策に積極的に取り入れた。
  - b. マラリア対策として構想された熱病病院の建設は、紆余曲折の末に実現した。
  - c. イギリスはインドにおける医療と衛生について不介入政策を取った。
  - d. イギリスの医療政策によって、インド人女性が医療を受ける機会は急速に増えていった。
18. 筆者はイギリスの不介入政策や植民地支配についてどのような考えを持っているか、最もふさわしいと思われるものはどれか。
- a. イギリスの不介入政策は、植民地の人々の意見をくみ上げようとしない点で限界の大きなものだった。
  - b. 当時のイギリスの財政状況では、不介入政策をとったのは合理的な判断だった。
  - c. イギリスの植民地政策は、積極的な介入の代わりに現地の人々の政治参加を招いたという点で適切ではなかった。
  - d. イギリスの植民地政策は、現地の人々の意思を無視し続けた結果失敗した。

## 19. 削除

20. 非ヨーロッパ世界に伝えられた近代的な公衆衛生が、人々に「身体の植民地化」をもたらすものと認識された理由として最もふさわしいのは、次のうちどれか。
- a. 1860年代にイギリスはインドで服務するイギリス人兵士を対象に、天然痘の予防措置として牛痘接種を開始したが、インド人兵士を牛痘接種の対象から除外したため。
  - b. 牛痘接種にイギリス人兵士の家族も対象に含まれるようになったため。
  - c. 牛痘接種は、インド社会においてイギリス人に仕えていることのしるしとして理解されていたため。
  - d. イギリス人の公衆衛生における差別主義的な政策に対して、インド人の多くは無条件的な服従の姿勢を見せたため。

## 21. 削除

22. イギリスによる香港の衛生改革に関する説明として最もふさわしいのは、次のうちどれか。
- a. 下水処理の方法に関する論争は、公衆衛生に関する公権力の介入をどこまで認め、経済活動の自由を求める現地社会の意向とどのように折り合いをつけるかという問題を提起していた。
  - b. 香港総督府は1897年に危険流行病予防改善法を成立させたが、この法令は香港人の激しい反発を引き起こした。
  - c. 中国人居住区に対する衛生対策をどのように進めるかについて、香港のイギリス人統治者の間には三つの考えが存在した。
  - d. 衛生政策の方針を決定する機関として設置された衛生委員会は、イギリス人のみで構成されていて、中国人エリートの参加は認められなかった。
23. インドや上海における当局の衛生対策について、筆者の考えとして最もふさわしいものはどれか。
- a. 当局の強硬な疫病対策は、ペストの撲滅を図るためには不可欠なものだった。
  - b. 当局の強硬な疫病対策は、現地の人々の習慣や要求を無視したために受け容れられなかった。
  - c. 当局の疫病対策は強硬なものだったが、自分たちの習慣に固執した現地の人々の反応も誤りだった。
  - d. 当局の疫病対策それ自体は正しかったが、地域によって対応がまちまちだったために成功しなかった。
24. 19世紀末のペスト流行に関する説明として、最もふさわしいものを一つ選べ。
- a. オランダの細菌学者であるコッホは、インドでペスト菌を発見した。
  - b. フランスの細菌学者であるパスツールは、ペストワクチンの予防接種で効果をあげた。
  - c. 日本の細菌学者である北里柴三郎は、香港でペスト菌を発見した。
  - d. 日本の細菌学者である野口英世は、アフリカでペストワクチンの研究を進めた。

25. 1908年に上海でペスト患者が確認されたことによって起きた出来事に関する説明としてふさわしくないのは、次のうちどれか。
- a. 上海のペスト騒動は「病院に隔離された人の身体を原料として薬を作っている」といったデマに惑わされた無知な下層民による排外的な行動であった。
  - b. 租界当局の感染防止のための措置に対して、民衆が抵抗する騒動が発生した。
  - c. 当時上海はヨーロッパ諸国が租界を形成して統治していた。
  - d. この事件は、公衆衛生の概念が現地の住民を従属させ、支配することによっては受け容れられないという教訓を残した。
26. 上海ペスト騒動で明らかになった当時の中国人の医療に関する考え方として、最もふさわしくないものを一つ選べ。
- a. 医療は患者の家族や知人が中心となり、みずから医者を招いて患者を治療させる私的な活動と考えられていた。
  - b. 医療とは医者と患者が病院という閉鎖的な空間で行うものとは考えられていなかった。
  - c. 中国医学の伝統をもつ中国では、西洋医学への反発や外国人医師の検査に対する恐怖心が強かった。
  - d. 中国では古くから無為自然の考えがあり、治療という行為に対しては消極的だった。
27. 削除

28. カミュが『ペスト』を執筆した背景の説明として、最もふさわしいものを一つ選べ。
- a. この物語は実際にアルジェリアで発生した疫病流行の史実を踏まえて書かれている。
  - b. この物語で子供が犠牲となるストーリーを描いたのは、アルジェリアに残したまま死別した息子への追悼の意図がこめられている。
  - c. この物語で都市住民の間に分断と対立が広がった様子を生々しく描いたのは、アルジェリア戦争の経験が影響を与えている。
  - d. この物語でカミュが都市封鎖を「追放」「監禁状態」と表現したのは、彼自身の体験が影響を与えたことを物語っている。
29. 中世イタリアでは、伝染病が神の怒りによって出現するという病理観が存在した。こうした病理観と比較して、カミュの『ペスト』に表われた考え方の違いを最も適切に説明したのは次のうちどれか。
- a. 『ペスト』では、伝染病が神の恣意的な怒りではなく、神の正義を表す裁きとして描かれる。
  - b. 『ペスト』では、伝染病が悪人にだけに襲い掛かるものではなく、不特定多数の人に広がるものとして描かれる。
  - c. 『ペスト』では、伝染病が不条理極まりない災いであると同時に、その災いの痛みを共有する人々の間に連帯感や人間愛を芽生えさせるきっかけとして描写される。
  - d. 『ペスト』では、伝染病への対策は共同体全体で講じるものではなく、個々人が一人で実存的に向き合うべきものとして描写される。



30. エドワード・サイードが『文化と帝国主義』で、カミュを批判した理由として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. カミュの無神論的実存主義が神の裁きとして病気が出現するという伝統的なキリスト教の考え方を否定したため。
  - b. カミュがアルジェリアの原住民の現実に冷淡な態度を取り、当時の植民地主義に対して批判しなかったため。
  - c. カミュが非暴力平和主義に基づき、アルジェリア戦争の正当性を認めることを拒否したため。
  - d. カミュが小説『ペスト』で、古代ギリシャの伝統をひく「地中海精神」を重んじ、もう一方でイスラム教の教えに対しては偏向した見解を広めたため。
31. ボッカチオの小説『デカメロン』とカミュの小説『ペスト』における共通点あるいは相違点の説明として最もふさわしいのは、次のうちどれか。
- a. 『デカメロン』も『ペスト』も合理のおよび科学的な病理観を提示している。
  - b. 『デカメロン』は一人称小説であるが、『ペスト』は二人称小説である。
  - c. 『デカメロン』と『ペスト』は共にペストと向き合う、多様な人間群像を描いている。
  - d. 『デカメロン』はキリスト教に対して否定的であるが、『ペスト』は肯定的である。
32. カミュが主張する地中海精神について、筆者の解釈に最も近いものを一つ選べ。
- a. 地中海精神とはギリシャの伝統をひく開放的な文明観を意味しており、歴史哲学に代表されるドイツ・イデオロギーと対立するものだった。
  - b. 地中海精神は古代カルタゴの伝統をひく海洋文化を意味しており、キリスト教世界で支配的だった超越者による審判を否定するものだった。
  - c. 地中海精神は南フランスと北アフリカを一体のものとして考える地政学的な概念で、フランスの植民地統治を正当づけるものだった。
  - d. 地中海精神は海や太陽といった自然の力に対するカミュの強い信頼を表す言葉であるが、別な超越的な存在に依拠する点でまた一つのイデオロギーだった。

33. カミュはアルジェリア生まれであったが、1954年にアルジェリア戦争が起きると、この戦争に曖昧な態度をとり続けた。アルジェリア戦争について最もふさわしい記述は次のうちどれか。
- a. アルジェリアの支配権をめくり、フランスとイギリスが衝突した植民地争奪戦争。
  - b. フランスの支配に対するアルジェリアの独立戦争。
  - c. アルジェリアの多数民族であるベルベル人とアラブ人の間で起きた内戦。
  - d. 先住民と対仏協力者の経済的格差が生み出した、共産主義者による革命戦争。
34. 筆者によると、カミュは必ずしも植民地主義者ではなかったが、その論拠として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. カミュはアルジェリア生まれで、祖先はボルドーからの入植者であり、母親もスペインからの移民だったから。
  - b. カミュは『異邦人』の中で、理由もなく殺されるアラブ人を無慈悲なタッチで描いているから。
  - c. カミュは『ペスト』で疫病の流行を前に積極的な対策を取る、献身的な植民地政府の姿を描いているから。
  - d. カミュは自分たちの掲げる正義を絶対化し、そこから外れてしまう「他者」を攻撃するような排他的な文明観を拒否したから。
35. カミュ『ペスト』の内容について、筆者の考えに最も近いのはどれか。
- a. カミュの『ペスト』はナチズムに対するレジスタンスの英雄的な闘いを記した記念碑的な労作である。
  - b. カミュの『ペスト』は近代ヨーロッパのエゴセントリックな文明観を批判したという点で評価されるべきである。
  - c. カミュの『ペスト』は反植民地主義を唱えたという点で高く評価されるべきである。
  - d. カミュの『ペスト』はキリスト教の救済論を否定した点で評価されるべき作品である。

36. カミュとサルトルは共に実存主義者と言われるが、彼らに影響を与えた哲学者として最もふさわしくないのは次のうち誰か。
- a. キルケゴール
  - b. ハイデgger
  - c. ニーチェ
  - d. フーコー
37. 感染症の流行が生み出した差別の事例として、ふさわしくないのは次のうちどれか。
- a. 19世紀のロンドンでは、市政府が一部の住民にだけ、コレラ菌の感染源と特定されたポンプの使用を禁止する措置を取った。
  - b. 明治期の日本ではペストの流行をきっかけに、特定の部落に対する公権力の統制が行われた。
  - c. 日本ではハンセン病に罹患したと思われる人々に対して、徹底的な隔離措置が行われていた。
  - d. 20世紀末におけるエイズの流行は、それが黒人の同性愛者に特有の病気という偏見をもたらした。
38. 資料における筆者の最終的な論旨として最もふさわしいのは次のうちどれか。
- a. 「病気と科学の戦い」というイメージとは裏腹に、人間は病気を前にしたときに不安から他者に対する違和感を呼び起こし、相手を排斥して差別を強化することをくり返してきた。
  - b. ファシズムであれ、マルクス主義であれ、あるいは帝国主義支配からの脱却をめざす反植民地主義であれ、それが自己中心的（エゴセントリック）な思想となった際には、人はいかなる手段を用いてもそれに抵抗すべきである。
  - c. 「病気との闘いの歴史」あるいは「病気の克服と復興の記録」といった言説には、弱者への差別的なまなざしを含んだ二項対立的な進歩主義が色濃くまわりついている。
  - d. 私たちが病気について考える時、まず注意を払うべきは自己中心的な歴史認識や公権力の強圧的な施策に現れる社会の歪んだ構造である。

39. 資料の論旨に基づくと、最近のコロナ禍が現代人に与える教訓について、最も適切に説明するのは次のうちどれか。
- a. 新型コロナウイルスが流行するようになった経緯や原因を徹底的に究明し、その責任を問うと共に、同じ過ちが二度と繰り返されないように全力を注ぐべきである。
  - b. 自己中心的な歴史認識や歪んだ社会構造に対する批判精神を堅持し、社会的弱者に対する差別を防ぐべきである。
  - c. 14世紀のヨーロッパで、ペストの流行の後にルネサンスという文芸復興が到来したように、コロナ禍の後に文化的な再生が起きるように努力すべきである。
  - d. 医学的かつ科学的病理観の重要性を明確に認識しながら、新型コロナウイルスに効果的なワクチンと治療薬の開発に人類の力量を集中すべきである。
40. この文章にタイトルをつけるとすれば、最もふさわしいと思われるものを一つ選べ。
- a. 近代公衆衛生の成立と発展
  - b. 植民地支配と衛生政策
  - c. 歴史のなかの病気と社会
  - d. 伝統医療の衰退と近代医療の誕生

(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

